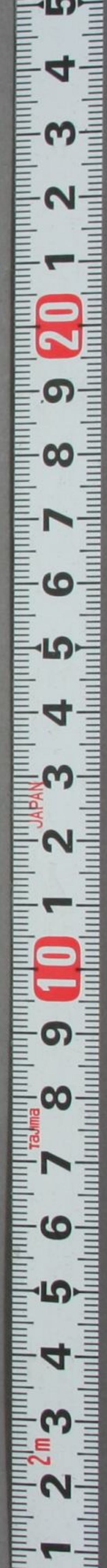




南
 風
 化
 集
 卷
 一
 尾

特柳田文庫
 文庫11
 A 717



特 A 747



深遠正房表
東海開化時
編上

48-8737

自序

付歴強化中ヤトウチウ主書シヤク世孝セコウ八ハチある志シ奈何ナニカある

幸福コフコウをり得エきしりせんセン十五ジュウゴ舎ヤの殿テンの海ウミ

とる実ミ然ゼンとトそりしき出デ一イチふ方フウ若ニハ者シヤたち

王オウ下カニ細ヒヨ言コトきく一イチ渠カグ若ニハをくふ喝カクふ事コトが人ヒトを

大ダイ公コウハせざるを那ナ一イチ中チュウ今イマ書カキ籍セキの需スなり

則ち用紀膝軍毛と語一聖きりくへを
綴りてよとあり今ぞも陸より汽車人車
あり海より汽船の渡法ありと廉價と
語のおもしろき時終に土地も膝を二軍毛に
抱く肉刺を踏出さる方もあり彈更なる友
飯食垣しじが西洋へ近流らせり断る備

抱り火をせし後何人姑く二軍毛の足を体免
馬鹿ふたけの世を擧ぐ會はる程けろそと言ふ
と海の限りの世も火編り暑晴がかりと
サッソ後りまのり何れも馬鹿は乃
一婦人ありと此

おは八穂
三婦人二の

戯墨堂主人誌也



天狗屋
山四郎

化本恩守

所匠
おそし



行麵屋
強次郎兵衛

史記左傳次

細井資本太

令書せし

史記左傳次

喜多八



社用強判する殊の外多忙な方
之内社外のむご口
連中出入車四り
中上ル也
但願お持参の
内字は例に依りて

喜多八
か
西陣の
連中も
~~~~~

新編開化膝栗毛 初編卷之上

耽奇郎文庫

東京 深崎延房著

第一回

昨日こそ早苗とリーグ何時の間か秋風起つて白  
雲をび雪の巴と降りまきり暮ふ梅花の開花初  
上野丸島の八重一重色ある春ふ立返るあじ客  
穩の程りゆく夏電信機線の如く又浪屋の流  
車お似たり其度毎十年の豆を一粒づ算へ殖せ

嫁ハ台チ姑とあり 青年何時り 甚備願と 考む茲  
 与ち先ん在 仕郎節 及び花多八とり 若高き二個の  
 滑碧老あり 先年 東海尾を登り 近江の湖山を  
 渡ると言ふ 人矣の 刺身と酒でも 飲り 中山尾を  
 下ると見 本曾の山をりりあり 西王母り 極く  
 抛を盗して 食ひても せり 十返舎り 世強ふあり  
 馬鹿を登り 居る願も 随分盛んの 年餘あり 一  
 夫より 許歩の 門松を 潜るが 今でん 一九九 九十歳也

及ぶべきの 計算の ぬれど 容貌更ふ 若ふ考らむ 年六  
 智恵も 垢ざりあり 毛張今ても 百文のものあり 文久  
 二つも 扱とる 白鹿志 当時 何大區くの 知らむ 住居ハ  
 神田の 八丁堀表 掛りハ 少一 瓦取り 堀も 都も 総て  
 咸書べ べきあり 凄廻り 見着ふ ガラスの 麻を 設けて  
 西洋造り 小摺敷 されど 裡ハ 瓦下の 麻屋 あり 破り 瓦  
 隙さん 色の 舞り 毛布の 一疋 喰 盈一の 深み 灰  
 ちんべり 瓦屋 けとも 傷ふ 瓦多八 伍名 附の 野屏を

小聲こゑに讀よんで居ゐる一いつが腕うでで紙しを服はきへきり大  
 口くち吹ふく夕ゆふびを為なさぐら傷やれ在ある食た卓くわを黄わう量りやうの代しろ  
 小こく丸まる福ふくあぐ立たち居ゐる弥や也え命いのちあふち封ふうひ  
 先まヨイ弥や次じさんおぬえり弥や次じさんト呼よびせど一向い向むふ目めは  
 覚おきさぐ一い書しょ覺かくしてきらくと思おもひ側わきへ多おほく一い向むふ目め  
 さん巡めぐ査さするが来きくと信しん山さんが声こゑで言いへば弥や也え命いのちあ  
 怖おそり一いつが側わきあつる古こ浴よく衣えを逆さかさるふ引ひけりあぐら  
 身みへ顔かほを招まけり真ま手ての免めん下くださいま一いつが私わたしの抱いだきの

困こ窮きう者しやで罰ばつ令れいを上うせしめ今いま報はつ悔くわいを他たへ  
 きく来きを穿くひちを穿くふ為なす事ことおまをくら何なに  
 卒そつ晦まい日にち迄までの可よるぬ筋しん糸いと下くださいの糸いとト泣なき声こゑを出で  
 一いつが乾か入いる秋あき先ま身み八はちの足あしく居ゐる一いつが堪たへどフツ  
 吹ふ出で一いつが一いつが弥や次じさんおぬえり悔くわいとのう又またの狐きつねも  
 でも化くされさらむをそふ耐た罪ざいく行ゆけをりをいれど一いつが言い  
 一いつが一いつが一いつが天あま窓まどをけ回まわりて見みたり一いつが一いつが  
 一いつが巡めぐ査さの代しろ一いつが仕し事こと一いつが一いつが巡めぐ査さするが来きるもの一いつが一いつが









でも在り申さる子 細入はまゝに 以捨物 實の過日事  
いゆし申しして 家祿の奉還令を 昨日落しお至り申さ  
社 更の空ふ 忍候ふ 依之子 細入所が 格別 忍候であの申  
金時 借り奉還をとり 執言とりのが 云連と合係し  
會社を 取立る 資本金をとり 積り申で 昨日お下金ふ  
あつさうら 夫を 請取つて 内へ 戻つて 見ると 鼻アめり  
電信を 取ると 入へて 麻布の 伯父公が 浦やふ 侍受あ  
あつて 其奉還令の 何ふ 取立ると 申さるる 新より 社を

組む 活計の 道を 立て 積り ごとりと 伯父公が 大不義  
知で そんな 空ふ 咄し 大切な 奉還令の 申さるぬ 尤も  
強々 其社が 盛大な ありと 言ふ 見せ けり くの 鬼も  
南も 先づ 夫迄に 此令の 吾倚が 預けると 言われ 室ふ  
困つさう 是迄 借も あり 馬鹿を 取ら 世強ふも  
あつて 伯父の 事であらう 預けり 更の ありあつとも 言れ  
あつて 漸々 其うち 十圓 大借の 子元へ 預けり 強の 申さ  
預けられ 仕舞申さ 咄し のち 夫 幾人 命 惜と 困

持火もちび両りやうのの小こ提てくく 俾まりまりま 去さへ今日けふの不ふ潔けつくく 何なにののも  
ああののくくら 水みづ具ぐをを一ひと待まち候こうのの難なん版ばんをを言い分わくく 事こと中ちゆうくくののここをを  
手て取とりりのの事ことをを言いふふののこことと何なにとと氣きててんんがが利きてておおややせせとと  
言いふふ火か強かう信しん常じやう信しんのの又また目め提てけけくく 強かう言い火か言いののこことと速すみくく  
桐きりでもでも舟ふねめめりりとと左ひだり右みぎりりあありり 桐きりもも出でままままがが是こゝらら下した圓まる吹ふ  
ああががららのの咄はなとと知しるるべべい

第二回

細こトトキキニニ強かう張ちやうさんさん 今いま咄はなをを通とほりり 金かねをを預あづかるる 仕し業ぎやうとといいふ

伯おぢ元もとのの室むろのの些ちもも 開ひらけけぬぬへへ 齋さい祭まつりのの凝こ行ぎやうききのの指さしすす  
人ひとどどらら 始はじめままりり 悪わるららいいとといいふふ ぬぬりり 強かうナナニニ今いまななおお互たがひひよよ  
社やしろをを能あたむむののもも然しかららいいふふ 齋さい祭まつりのの固かたままりり 始はじめままりり 去さるる 齋さい祭まつり  
一ひと開ひら化けのの近ちかまませせややううとといいふふ 妻つまををももととりりままささりり 先まのの  
其その伯おぢ父ちちさんさんららいい 先まへへ 齋さい祭まつりをを一ひと齋さい祭まつり病びやうをを 全ぜん快かいまませせとといいふふ  
領りやうつつのの金かねををかかりりとといいふふ 以も自みづか己ぢのの金かねをを出ですす 入い社やしろにに為なすす  
とといいふふ 言いひひふふささりりもも 知しるるややせん 細こ知しるるららいい 仕し業ぎやうのの  
命いのちををかかりりとといいふふ 僕わがのの金かねのの右みぎのの始はじめままりり 齋さい祭まつりのの

同様の合口も、他の連中の出金方の何程ぞ、何れ  
おても連々蓄蓄を貯てんものご、夫れも強強  
さん君の金融ハどん分地ご子、強た格サ、吾侪も鬼匹同  
悪く、小野善の身代限よ何のと、大き小懐を痛め  
中々、まへ、むら、は、ぜ、鬼で、二両指を、と、た、お  
新り、気が、遠ひ、そ、ま、つ、ま、の、つ、け、ま、ど、も、小野善  
あんぞ、天保一放でも、取引の出、あ、風、り、日、強、ま、ま、ま  
金、計、の、口、を、利、ろ、お、め、違、り、吾、侪、の、會、計、を、知、つ、ろ

堪るものろ、そ、こ、で、細井さん、今、ま、ま、通、り、の、法、ご、ろ、ろ  
ひ、え、の、所、ハ、不、然、金、ご、ろ、静、園、の、伯、母、の、所、ハ、部、便、を  
一、通、も、ま、ま、通、り、用、ご、ろ、便、ご、ろ、一、僕、の、金、集、め、ろ  
少、一、遷、延、あ、ろ、ぬ、ご、ろ、那、天、物、屋、の、山、田、席、ハ、以、存、知、の、宛、り、の  
蓄、財、家、ご、ろ、の、ふ、其、外、の、連、中、ろ、も、辛、と、言、へ、ん、金、を、出、ろ、ろ  
と、言、へ、ん、お、ろ、ろ、三、君、も、ろ、ろ、の、ご、ろ、ろ、鬼、も、角、も、君、の、奉、還  
金、ご、ろ、下、ご、ろ、ろ、で、の、社、中、へ、廻、信、を、ま、ろ、ろ、集、會、を、作、ろ、ろ  
更、と、あ、や、せ、ろ、ト、咄、の、折、ろ、ろ、門、口、よ、り、強、改、さん、内、ろ、ろ、ト

いひあがりばつと入来二個連一口ハ天物屋山田とて  
裁後上布の惟子小橋竹子の帯を結び縹小崎針の金襴を  
引掛け生綿緞の袴羽織を互で懐に入きてる完酔樂  
屋小庵あるこんとの有や老やハ知ら子ども飯成分家の旦那  
と見へたり又今一口ハ花本思安とりハ西洋風の匡五ハ  
「たのけぬ」たのけぬ 籠籠籠の編のたのけぬ 紋射のたのけぬ 水小遠入りとら小  
羊羹色の紵の羽織をひらりと引掛け唐紙給の平骨  
あく胎のたより致たあきあがり山一列は来とりふと大そら

久しいやどどグニ三日お月おきりらんどう何程ござ今年  
思入ふあきやと子強イヤ両大人今足違の使  
車車を強つふと思つて廻状を書かけ所サ山細井  
忍のい出の在り花々如状見ると例のお親お命の成  
病とのぞきたのけぬ 蕨葉小揃らとでもよ張り子知ハい山下金  
あハ成中とら開ぬふ少一仔細がめつて山々丈夫どやハ  
出金があるれふといとでも言ふ後子強ハ二さんあ張り  
ありやせん其金ふ結く伯奈んのさふ少一云云がめり

中を夫の僕が役得をいぬが直下分解する  
穴あり細君が熱う法念へが直下分解する  
先生をも僕が初めく入社をおさせまうもの  
暇味とくわいごん尾解のえざり念を押しもの  
思へ強攻せんとも縁てお心島い中での僕への  
心能の心をもつて天狗屋の親方のお心ごん  
齋祭を産後く開化小進めする事を弘める為の  
会社と兼ねありし中ご僕も医書の上のまわら

然るりふまあら同盟が致しぬ物と思ひ申す  
僕も是迄佐藤の塾も居て医書を勉強する  
齋祭と法も草の方組を医書の上の居て法をも  
見んまらりやせんら種々工夫を居て見ん先づ  
僕が肥を両方の大下刻を以て齋祭を下痢補刻を  
用ひく開化小補ひ立ちより外不良法にめらまのり  
思ひ申す申すごんかあをり申す子強お考への通り  
あし下痢も補ふも草根本皮の力での連も



乃不妻ぐものりら 其病人の症小応一舌三寸の 齧刺を  
以て耳より強軍くせく 脈不通トさせ 病小的申  
と見の通小全性小至るとりし 此書脈の良薬ど何と  
元本さん直の佐原先せども 此匙加減ハ出来申せめ 思へ  
あま秘まじ申 某陽を用ひ多の言 諸君を病治を治申  
と言ふのさ子 尤も思安さん 此脈治の秘て 皇國の人臣の  
脈の中の押強をして 知識を増させ申すと云ふのさ子ら 叢  
業まをれば 岐度盛大ふあふ 遠ひのりやせん 并如て

弥次さん斯う 咄一ぐ極まぬ 何時開業を治ても 宜ひは  
大體素ある人のさりあが 忘るの言ふまむかり かくと  
言のく 胸を振る者ハあ、何き 強痛ふ 乃不妻あも あらふ  
が其時言込られる 申あ妻てハ 夫切味候をつけて 仕舞の  
どぐ 平氣多ハ 大木まり子 強ヨット 其妻あらハ 百も 兼知サ先  
大肺不病人ハ 借リ 糸口ハ 押入 付く 脈治を 治申せ 一 兼難  
病と 見ると見ハ 元本さんら 洋学の 先生ら 扱へるなる  
くら 處小 破刺と 出さけ申せ 其上も 六ヶ敷ハ 謹強て



並べ立ちく借等の手厚で汗もそそぐ病あはれこそは  
脱ゆせりおかしうありやとさる漢生後で其の  
史記左傳次とりし男入至極の貧せし近頃月謝  
洋つゝ知りし其難状放逐さきこと言ふまじから  
社中へ月張込とて申す此男より漢語の強弱を  
させても角すまはれやせめ人山々まよふ教  
先探つこと言ふものさふ強く聖屋の脚色ハを  
手りらるゝ所より心能なりす其如く同輩の病あり

何を引れを配らざらるるものと思つてくら  
へ見申さざらばこんと申す直つらるゝ看  
さいと何れぞし書くねん出とて飲食卓の上にお  
座りおのゝ顔をさしあせし流るる

稟告

往古より衆醫此を投ぐ曰く癡漢はけける  
遠ハのちど理を究めざるの諸より馬鹿も一掃の病  
あらば又こそ其治むる方何ぞありとせむりも

馬鹿小教品有り、空馬鹿有り、薄馬鹿有り、馬鹿  
正直有り、馬鹿律義有り、或ハ陽ハ英敵ト見入リ内  
心至極の馬鹿有リ、然レテ屹度馬鹿と言ハ物ナ  
偏リク考化有ク石部全吉ト仇名を交テも只公  
頑固の風を守リ、他を頼ル心有ルを馬鹿固キ  
人と言フ、尚此外ハ馬鹿大膽有リ、又ハ馬鹿飲  
馬鹿喰ハムド、奉テ物有ク不逞有リ、**セ**総テ馬  
鹿の名を被ル者、或ハ其度を過セると度ナクハ

ざりのニツナリ、即今本邦開化ハ近ク人民一和  
勲勵一富國強兵有ク、**ハ**此の陰新の如キの  
病者多ク、**ハ**其を治スルハ、**ハ**其の病根を愈  
スルハ、**ハ**其の病根を愈  
さんと別チ、我輩會社を設ケ、本月某の日開業セ  
抑、舊弊を固守シ、**ハ**即今開化ハ至ク、**ハ**其の病根を愈  
進歩のたを速クハ、**ハ**其の病根を愈  
究理の秘をも知らず、**ハ**其の病根を愈

識を度むるまをも得ざるは度ふ及ばざるの馬座  
と言ふべし右も我人己が馬座を馬座と知る者  
其が實に或は馬座と知りあづら馬座と名を以て  
恥るものありふべし今と申治するの方ありと听たその  
治座をまゝするまゝ生座馬座あり終らんは願  
馬座の限りあり斯言へる我輩も又此身下の  
多難ありしが此良法を獲ぬは其強知を得ざる  
故に普く之を世に施さんとて今此座治をまゝ

老弱きふ即座ふ平愈とてぐ重きも或は一廻り至  
極難治の症と雖も三廻りかゝる強ろ死んぬら  
通を同業の当報より来りて連うふ療養を乞ひ開  
化の人とあらんまはし今急務ふこと

○舊弊解脱丸

○開化進歩湯

○究理辨明丹

右の三方を主刺とせれども病症に依り加減の法を

用ひるものも 芥の教師の診察ふりまへて 総て 芥の  
耳より用ひるものも 食地何れも 差合ふ

毎日 午前八時より  
午後四時まで

神田八丁堀

詐八百番地

本局

柿麴社

療治代 一日金三枚 一週り金二十枚

芥の出入りのどろろ 皆さんよ 山深淵を 新真  
イヤ名文々々 一字一頁加四べん 所ありサ 山こりサ 新真

入まゝ 弘めまのどろろ 芥の 毎日 報社と 報野と 報知と 此  
三軒の 芥野へ 出まゝ 大膳 東京中へ 荒居 長日 弘の  
と 仕業や せま 〇トキニ お叱り ぶ 気 取ま 今入の  
お客方へ お返も 進中 芥の 花 八 燭 竹 芥の 芥の  
持ま さい 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の  
ぬり 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の  
芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の  
のサ 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の 芥の

言つゝ細井さんぐお買ふさりやうなぬつゝの甚う  
纏取まで去ふして仕舞つゝ何れもさう見えておるト  
真赤よあつゝ脈を立ち山田布ぐお一層め  
いサ〜今日迄本忍が社入あきらふ就て切も致  
持筆あまつゝの伏強つゝ置弁〜二升めりら  
随分氣おまぶ〜お知で借ぐ奇火一分氣強るら  
是ぐ中直りとせらり宜い 去へ〜又隙めやさう子  
る連借ぐお使ひふまはりやせ〜強入行紙近下司

ちろ〜おちろ〜おちろ〜おちろ〜おちろ〜  
ちろ〜おちろ〜おちろ〜おちろ〜おちろ〜  
酒堂とあつゝ尚も懇々お使ひ及び逆小開業の日次  
期〜おの〜愉快の色を露り〜二升の持入るの  
同小早脱底を傾けぬ

新編開化膝栗毛初編卷之上 終

